

撮影報告 SHOOTING REPORT

空想の森



田代陽子 監督・撮影・編集
TASHIRO YOKO

2000年から撮影のための準備を少しずつ始め、2002年春から16mmフィルムでの本格的な撮影を開始した。カメラは借りたエクレー。監督の私は、1996年までは映画とは無縁だった。この年に北海道の「新得空想の森映画祭」で、初めてドキュメンタリー映画をスクリーンで観た。これがきっかけとなり、2本のドキュメンタリー映画のスタッフとして映画づくりに携わるようになった。観る方とは言えば、1997年から山形国際ドキュメンタリー映画祭にかかさず参加するようになり、映画の多様性・奥深さに魅了されていった。

そんな私が映画を撮ることになった。現場のスタッフも経験の浅い人ばかりだった。この時何も知らない私は、何の疑いもなく映画を撮る気でいた。私には確かに撮りたいものがあり、表したい感覚があった。しかしそれは、いつも言葉ではうまく言えなかった。そこから何かが始まっていくのではないかと、ほんやりと私は思っていた。知らないというのは怖いもので、ここから10年、映画と格闘することになるなんて、その時の私は夢にも思っていなかった。

始めの頃、私は被写体の人たちに撮影することを認めてもらうのに必死だった。被写体の人たちは口々にこう言った。「自分たちの暮らしや仕事を撮って何が面白いの？ 誰が見るの？ 映画にならないでしょ」それでも、いっしょに

働いたり、ご飯を食べたりしながら、折々に映画を撮りたいという話をした。今でもうまく言葉で説明できないのに、この時点で私は一体何を彼らに話していたのだろうか。が、そのうち「なんだかよくはわからないけど、撮ってもいいよ」と言われるようになった。

しかし、フィルムでの撮影時代は何をやってもうまくいかなかった。確かにフィルムにはなにがしか映ってはいたが、ちっとも撮れていなかった。ラッシュを見る度にガックリし、なんとか打開せねばとスタッフと話し合いを重ねた。しかしカメラマンと撮影に対する考え方の溝が深まる一方だった。自分の撮りたいものは撮れず、いい場面を撮り損ねた後悔の念ばかりがいつも私の心を占めていた。そうこうしているうちに、資金も行き詰まり、録音部の岸本君以外のスタッフは辞めていった。この後2年間、全く撮影ができなかった。出口のないトンネルの中にいるような心境だった。2004年冬、私はどんなことがあっても、絶対に映画を完成させると心に決めた。そしてフィルムでの撮影をあきらめ、私がビデオで撮影することを選んだ。

2005年、中古のビデオカメラを買い、録音の岸本君と二人で撮影を再開することになった。私の撮影を不安に思っていた岸本君が、大学を卒業したばかりの撮影志望の一坪君を連れ

てきた。私はこの一年で撮りきろうと決めていたので、新しい人と一から関係をつくっていくことに億劫な気持ちだったが、とにかく一度ロケをいっしょにやってみるようになった。春まだ遠い3月、水の出ない宿舎の中。ストーブを囲みながら、私、岸本君、一坪君が顔を合わせた。

私はどんな映画をつくりたいのかを話したと思うが、この時具体的にイメージが決まっていたのはラストシーンだけだった。それを聞いた一坪君は「それは面白いですわ。この映画、いっしょにやりたいです」と私に言った。何回かのロケを経て、彼は自然に被写体の人たちとこの土地に馴染んでいった。この映画の撮影の基本的なスタンスは彼が提案した。人の目と同じサイズで撮る、ズームは使わない。よく見たい時は近づく、広く見たい時は離れる。この意見には私も大賛成した。そして私は彼が撮った方がいいと判断したシーンは安心してカメラをまかせるようになった。撮影部、録音部それぞれのスタッフが、被写体の人たちと関係をしっかりと築きはじめると、3人の持ち味が活かされた手ごたえのある撮影になっていった。

私には撮影技術はないので、何をどう撮るか、試行錯誤の撮影だった。農作業の撮影は、天候や仕事の進み具合によっては、狙っていたことが撮れないことも多い。それはそれでよかった。どうしても撮りたいものもあったが（宮下さんの蕎麦落としなど）農作業自体にそれ程こだわらなかった。

撮影の基本として、カメラを持つ私がいることを隠さず存在させて、私もその場を被写体の人と共有して、映像にすくい撮ることを心掛けた。撮影をしている私に、被写体の人たちは普段と同じように話しかけてきた。私もいつも通りに答えた。それでいいと思った。そういう関係を時間をかけてつくったからこそ、撮らせてもらったのだから。

私はロケの度に、被写体の人たちを宿舎に招き、一品持ち寄りの食事会を開いた。彼らにも、よく食事に招かれた。美味しい野菜やチーズをつくっている人たちの料理はやっぱりとてもおいしかった。私たちは食事会の度に、撮ったラ

ッシュを被写体の人たちに見せた。それはとても重要なことだった。私たちが何をどう映し撮っているのか、彼らに伝えられる。私たちを理解してもらえることでもあり、いっしょに映画をつくっている意識が芽生えることにもなった。ああでもないこうでもない美味しく楽しくて本当によく食事を共にした。スタッフと被写体の人たちとの交流が深まったことで映画音楽が生まれた。これは思ってもみなかったことだった。

後に岸本君が私にこう言った。「その人の作った料理を食べる事が、その人を一番よく知ることができる」と。私もそう思う。

被写体の人たちからロケの度に野菜を分けしてもらい、お金はなかったけれど豊かな食生活だった。短い間だったけれど、私たちは宿舎での共同生活を大事にしながら映画と向き合った。

約100時間あるラッシュの中で、ある10秒程のカットがまるで永遠に続く時間のように感じる時があれば、1つのシークエンスを何時間も撮影しても結局は使えなかったり、冬の寒さに耐えながら撮った風景よりも、何気なく撮った風景の方がその時の自分の気持ちがストレートに出ていたり、編集であれこれカットを入れ替えても、突然思いがけないカットが入り込んできて映画の中核を担う様になったりする。ドキュメンタリーの作業とは全く不思議なものだ。

この映画の撮影・編集作業は、物語を作っていくのと同時に、この不思議な感覚を自分なりに解き明かしていく作業でもあった。映画が完成してもこの不思議な感覚の答えがでたわけではないが、私はいつか自分なりの結論を見つけ出してやろうと思っている。この映画は、そんな私たちのすったもんだを記録した映画でもあります。

撮影：田代陽子 一坪悠介

録音：岸本祐典

整音：久保田幸雄

編集：田代陽子 岸本祐典

『空想の森』2008年7月26日（土）よりポレポレ東中野にてロードショー